

アセスメントポリシーによる学修成果及び教育効果の検証 **アドミッションポリシー**

	アドミッションポリシー	
	資料	結果と解釈
機 関 レ ベ ル	①各種入学選 抜	入学生の評定平均値の平均は 3.94 点（標準偏差 0.429、最高値 4.8、最低値 3.0）、小論文試験の平均点は 73.36 点（標準偏差 8.45、最高点 95.5、最低点 60.5）、面接試験の平均点は 78.46 点（標準偏差 5.63、最高点 90、最低点 70）であった。 また、総合型選抜においては、アドミッションポリシーに基づき、入学志願者の個性や多様な経験、学びの意欲を評価・判定をするべく、従来の小論文および面接試験から、面接およびプレゼンテーション（絵本の読み聞かせ、ピアノの弾き歌い、素話、自己 PR から選択）に変更した。面接およびプレゼンテーション試験の平均点は 79.53 点（標準偏差 8.29、最高点 91、最低点 60）であった。 今年度は、アドミッションポリシーに合致する学生を募集することができたといえる。
	②短期大学生 調査・オープ ンキャンパス の状況	短期大学生調査から、本学が第一志望であった割合が 93%（全国平均 90%）であった。また、本学に進学を決める際に重視した点として、「就職するのに必要な資格が取れる」の項目に 99%が「重視した、やや重視した」と回答している（全国平均 90%）。 専門職として、社会で活躍するという高いモチベーションを持った学生が入学していることが伺える。 一方で、「オープンキャンパスの印象」の項目では、「重視した、やや重視した」と回答したのが 76%（全国平均 84%）であった。従来からの本学の魅力発信はもとより、専門分野に触れる機会を複数回に分けて促したり、情報提供の多様化とオンライン活用等の充実を図る必要がある。
教 育 課 程 レ ベ ル	③各種入学選 抜	本学は単学科となるため、機関レベルと同一となる。
科 目 レ ベ ル	④入学前課題 の確認試験	令和 6 年度入学生の一般教養テスト結果を令和 5 年度（いずれも 60 点満点）と比較すると、平均点は 25.75 点（前年度 25.82 点）であり、例年と同程度であった。このことから、入学生の学力は一定程度維持できていると考えられる。 学力面で平均よりも遅れを取っている学生に対しては、学習上の支援が必要となる可能性がある。

アセスメントポリシーによる学修成果及び教育効果の検証 **カリキュラムポリシー**

	カリキュラムポリシー	
	資料	結果と解釈
機 関 レ ベ ル	①退学状況	・令和5年度 入学 34 名 退学（除籍）2 名、休学 0 名
	②休学状況	・令和6年度 入学 44 名 退学（除籍）3 名、休学 0 名 退学（除籍）率が 6.41%（前年度 2.67%）で前年度より高いため、学習・学生支援を強化していく必要がある。
	③短期大学生調査	・学習意欲、学修行動に関する項目 「Q11 あなたが受講した授業では、次のようなことはどのくらいありましたか。」の質問項目は、4 件法（よくあった、ときどきあった、あまりなかった、まったくなかった）で調査を行った。「よくあった」及び「ときどきあった」を合算した割合（以後、「あった」と表現）が、全国平均と 10 ポイント以上乖離しているものについて次に取り上げる。 「定期的な小テストを受ける」の項目は、「あった」と回答した学生の割合が 96%（全国平均 85%）であった。日頃から授業内容の確認テストを実施し、学習効果の向上を図っている結果であると考えられる。 また、「正解や答えのない問題や課題について考える」の項目は、94%（全国平均 84%）であった。これは、単なる知識の習得ではなく、思考力・創造力・価値判断力などを養うための深い学びにつながっていると考えられる。 こども学科としては、より魅力的なカリキュラムの整備、また各教員において日頃からより魅力的な授業の実施に努めており、上記の項目に関しては成果が表れていることが伺える。 一方で、「これからのキャリアやライフデザイン、働き方について学ぶ（インターンシップを含む）」の項目は、「あった」と回答した学生の割合が 66%（全国平均 82%）、「パソコンやタブレットなどの情報機器を使う」の項目は 74%（全国平均 86%）、「オンライン授業を受ける」の項目は 3%（全国平均 33%）、「学習ポートフォリオや実習日誌、実習ノートなど学習記録をつける」の項目は 44%（全国平均 68%）、「外国語を使う」の項目は 25%（全国平均 51%）であった。学生の今後のキャリア教育として、社会人・保育者として自分の人生をどのように描くかを考える機会は、自己理解・社会理解・行動意欲を高めることにつながるため、弘徳豊岡教育やキャリアアップの授業内において関連する内容を一層促進していく必要がある。 ・成長実感に関する項目 「Q16 あなたは入学してから、次のような意識・能力はどの程度変化（向上）しましたか。」の質問項目は、5 件法（大きく増えた、増えた、変わっていない、減った、大きく減った）で調査が行われている。「大きく増えた」及び

		「増えた」を合算した割合（以後、「成長実感がある」と表現）が、全国平均と10ポイント以上乖離しているものについて次に取り上げる。 「地域や社会に貢献する意識」の項目は、成長実感がある学生の割合は、84%（全国平均74%）であった。日頃からのボランティア活動や大学祭和花季ひろばでの地域交流活動が奏功していると考えられる。 一方で、「パソコンやタブレットなどの情報機器を使う力」の項目は69%（全国平均81%）、「チームや組織をリードする力（リーダーシップ）」の項目は51%（全国平均62%）、「外国語を使う力」の項目は10%（全国平均37%）であった。令和6年度から「情報リテラシーと処理技術」の授業を1年次前期開講に変更したが結果としては不十分であると考えられる。本学は保育士養成校であるが、近年、保育現場においてもICTの活用がますます重要視されている。業務効率化・情報共有・子どもの育ちの可視化・保護者との連携など、多くの場面でICTの活用が進んでおり、ICTにおける科目の再検討が必要であると考えられる。また、弘徳豊岡教育の宿泊合宿や大学祭和花季ひろばを通して、柔軟なリーダーシップの養成が必要であると考えられる。
	④学修行動調査	本学が実施する学修行動調査において、「授業の予習時間」の項目で「全くしていない」、「30分未満」を選択した学生は77%（前年度52%）、「授業の復習時間」の項目では「全くしていない」、「30分未満」を選択した学生は25%（前年度16%）であり、復習中心の学習習慣となっていることが読みとれる。学習は、予習・授業・復習をバランスよく行うことが望ましく、適切な予習課題の設定を教員に求めていく必要があると考えられる。 また、「勉学や進路など、学生生活について教員や職員に相談する」の項目では、「まったくない」、「ほとんどない」を選択した学生が49%（前年度45%）となっており、引き続きオフィスアワーの運用や周知について検討する必要があると考えられる。 なお、これらのことは令和6年9月の教授会において教務学生課から報告があった。
教育課程レベル	⑤GPA	GPAは平均が2.53（中央値2.51、最大値3.76、最小値1.34、標準偏差0.72）、3.5以上が6名、3以上3.5未満が14名、2.5以上3未満が17名、2以上2.5未満15名、1.5以上2未満が18名、1.5未満3名であり、このことから、学生は「科目内容を修得し、学修成果を獲得している」と判断できる。 指導・助言の対象となる1.5（目指す学修成果の獲得基準）未満の学生は、3名（4.1%）であった。
	⑥単位修得状況	目的に合わせた最適な算出方法を検討しており、今回は除外する。
	⑦カリキュラムマップに基	本学の学修成果として、専門的学修成果と教養的学修成果を定めており、それぞれの割合は以下の通りである。

	づく学修成果別評価	教養的学修成果において、GPA 平均 2.0 以上の評価を受けている学生の割合は、①84%、②85%であった。 専門的学修成果において、GPA 平均 2.0 以上の評価を受けている学生の割合は、①89%、②64%、③84%、④58%であった。 このことから、1 年間の学びにおいて、学修成果の獲得が進んでいると判断できる。
	⑧成績評価	目的に合わせた最適な算出方法を検討しており今回は除外する。
	⑨出席状況	1 年生では各科目の出席率の平均が 91.2%、2 年生では 91.0%であった。
科目レベル	⑩授業評価アンケート	令和 6 年度の前期・後期の授業評価アンケートにおいて、各質問項目に対する回答の平均値は、前期・後期を通していずれも 4 点前後であり、良好な結果であるといえる。また、「質問 16 この授業を、マナーを守って受講しましたか。(居眠り、飲食、携帯電話の使用、私語等)」に関しては、前期 4.29、後期 4.29 と特に高い評価となっており、学習環境として良好な状態を維持できている。 また、「予習・復習」の項目に関しては、前期 3.48、後期 3.71 となっており、全項目中最も低い平均点となっている。ただし、「質問 15 この授業で与えられた課題（宿題など）にきちんと取り組みましたか。」に関しては前期 4.21、後期 4.20 となっている。これらの数値は昨年度と大きな変化はなく、真面目に授業に向き合っているが、自発的な予習・復習というよりも、課題を通しての授業外学習が中心となっていることが読み取れ、今後学生の主体的な学習を一層促進していく必要がある。

アセスメントポリシーによる学修成果及び教育効果の検証 **ディプロマポリシー**

	ディプロマポリシー	
	資料	結果と解釈
機 関 レ ベ ル	①卒業率	卒業生 32 名（令和 5 年度入学 34 名、退学（除籍）2 名）
	②学位授与数	卒業率：94.1%（小数点第 2 位四捨五入） 学位授与数：32 名
	③就職率	就職率：96.8%（就職希望者 31 名中 30 名）
	④専門職率	専門職率：100%（公務員 4 名、私立保育園・幼稚園・こども園 18 名、福祉施設 8 名、一般企業 0 名）
	⑤進学状況	進学状況：4 年制大学 3 年次編入者 0 名 専門職を中心とした就職状況は良好であり、4 年制大学への編入希望者・一般企業への就職希望者はみられなかった。
	⑥卒業時アンケート	卒業前の 1 月に、2 年間の大学の進路指導のアンケートを実施している。 進路決定において、「教員からのアドバイス」と大学が進路指導の一環として実施する「先輩からの講演」が役立ったと回答する学生の割合が多かった。 アンケート結果より、大学の進路指導全般に対する満足度が高いことが伺える。令和 7 年度に向けても、教職員間で情報共有しながら、個々の学生の状況に合わせた指導を行えるよう、進路ガイダンスや進路指導等のあり方を検証し、さらなる改善を図っていきたい。
	⑦就職先アンケート調査	令和 6 年度 6 月から 8 月にかけて、令和 5 年度卒業生の就職先にアンケートを実施した（一部訪問による聞き取りを含む）全就職先の 85.7%から回答があり、「社会人としてのマナーが身についているか（身につけている・やや身につけている）」93.3%、「保育者としての知識・技能が身についているか（身につけている・やや身につけている）」63.4%、「業務に専念し、努力し、貢献できているか（できている、ややできている）」86.7%と、短い勤務期間ではあるが、コメント内容も含め、高い評価と今後への期待が伺えた。 引き続き、本学の特徴である個々の学生に対する丁寧な指導を行うことが、本学の信頼をより一層高めることになると考える。 ディプロマポリシーについて、特に変更等の必要性を示す明確なデータはない。

	⑧短期大学卒業生調査	「Q6 あなたの現在の立場からみて、短期大学で学んだ知識や能力はどの程度役に立っていますか。」の質問項目は、5 件法（役立った、役立っていない）で調査を行った。「役立った」及び「ある程度役立った」を合算した割合（以後、「役立った」と表現）が、全国平均と 10 ポイント以上乖離しているものについて次に取り上げる。 「数値やデータを理解する力」の項目は、「役立った」と回答した割合が 47%（全国平均 60%）、「キャリア意識」の項目は 63%（全国平均 74%）であった。 保育の質の向上や的確な支援に数値やデータリテラシーが必要となることがあり、ICT における科目の検討が必要である。また、在学中のキャリア教育を強化し、職業人として働くための知識・態度・能力を身につけられるようサポートが必要であると考えられる。
教育課程レベル	⑨GPA	卒業生 32 名の GPA は平均が 2.66（中央値 2.70、最高値 3.58、最小値 1.51、標準偏差 0.53）、3.0 以上が 10 名、2.5 以上 3.0 未満が 11 名、2.0 以上 2.5 未満 7 名、1.5 以上 2.0 未満が 4 名、1.5 未満 0 名であり、学生は「科目内容を修得し、学修成果を獲得している」と判断できる。 指導・助言の対象となる 1.5（目指す学修成果の獲得基準）未満の学生はいなかった。
	⑩資格・免許取得状況	資格・免許の取得状況は、保育士資格 31 名（96.9%）、幼稚園教諭二種免許状 32 名（100%）であった。資格・免許の取得率は 90%以上となっている。
	⑪単位修得状況	目的に合わせた最適な算出方法を検討しており今回は除外する。
	⑫カリキュラムマップに基づく学修成果別評価(参考)	本学の学修成果として、専門的学修成果と教養的学修成果を定めており、それぞれの割合は以下の通りである。 教養的学修成果において、GPA 平均 2.0 以上の評価を受けている学生の割合は、①91%、②91%であった。 専門的学修成果において、GPA 平均 2.0 以上の評価を受けている学生の割合は、①94%、②78%、③91%、④72%であった。 このことから、1 年間の学びにおいて、学修成果の獲得が進んでいると判断できる。2 年間の学びの中で、6 つ全ての学修成果を獲得し、ディプロマポリシーに合致した人材育成が達せられていると判断できる。